FD NEWSLETTER

CONTENTS

- ―教員の勤務について―
  駒澤大学学生部長　吉津　宜英
- ＦＤ研修会
- 公開授業
  - ◆仏教学部　松田　陽志
  - ◆経済学部　姉歯　暁
  - ◆経済学部　松本　典子
  - ◆法学部　山崎　望
  - ◆経営学部　青木　茂樹
  - ◆経営学部　日野　健太
  - ◆医療健康科学部　金子　順一
  - ◆グローバル・メディア・スタディーズ学部　吉田　尚史
- ＦＤ推進委員会の今後の活動予定

―教員の勤務について―

駒澤大学学生部長・仏教学部教授　吉　津　宜　英

教員の勤務時間のあり方について意見を述べたい。今年から職員の勤務時間の管理体制については「勤次郎」というソフトが導入された。これをめぐって職員の間にかなりのカルチャーショックがあったと拝見する。

ところで教員の勤務であるが、私は専任・非常勤を含めて、何らかの改善策を実施すべきであると思う。5 年間日本大学文理学部に非常勤で出講したが、講師控え室で出講の印鑑を押した。専任も必ず同じ場所にサインしに来る。古橋広之進教授もサインしている姿を毎週拝見した。

大正大学にも 3 年間大学院に出講した。ここでは私の磁気カードが用意してあり、講師控え室に到着するとそれを機械に通す。講義が終わって控え室を退出する時にまた通す。すると「ご苦労様でした」という声が出る。機械からの音声ではあるが、ほっとするものであった。

我が駒澤大学の教員の勤務体制は自由である。これでよいのであろうか。講義の当日に休講を電話で伝える、俗にドタキャンは私にも経験がある。これは反省する。30 分経過しても教員が来ないという自然休講は教壇に立って 35 年一回もやったことはない。この自然休講が多いと聞く。

そこで提案であるが、非常勤の先生についてはカードを講師控え室に用意する大正大学方式が良いと思う。専任は現在図書館などで使用している磁気カードを講義のある曜日は出校時と退校時に機械に通し、勤務記録を残すことをルール化すべきではないか。

最後に月曜日問題について考えよう。平成 21 年度行事日程で審議決定された後期 2 回の祝祭日「体育の日」と「勤労感謝の日」の月曜日出講は、授業回数確保のための苦渋の選択であろうが賛否両論あるだろう。また学生部長としては今年度から正式に大学祭となったオータムフェスティバルを実行する際に月曜日に休講措置をお願いしなくてはならない場合もあり、悩むところである。月曜日問題だけではなく、学会出張などによる休講についても、補講の徹底化が必要であると思う。

一方的な規則の押し付けと、眼に余る自由放任ではなく、相互に納得のいく話し合いに基く善い加減の中道的なルール化を望んでいる。

ＦＤ研修会

駒澤大学ＦＤ推進委員会では、授業の内容と方法を改善することを目的としてさまざまなＦＤ活動を行っています。その一環としてＦＤ研修会を毎年実施していますが、今年度はＦＤの前提となる大学教育のあり方について総合的な検討を進めてきた中央教育審議会の委員である上智大学の髙祖敏明先生を講師としてお招きし、次のとおり開催しました。

１．日　時：平成 20 年 11 月 18 日（火）
　　午後 4 時 30 分～6 時
２．場　所：中央講堂
３．テーマ：中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」
　　が目指すもの
４．講　師：学校法人上智学院理事長　髙祖敏明先生
５．挨　拶：池田　練太郎　学長
　　司　会：安元　稔　ＦＤ推進委員会小委員会委員長

講　師：髙祖敏明先生

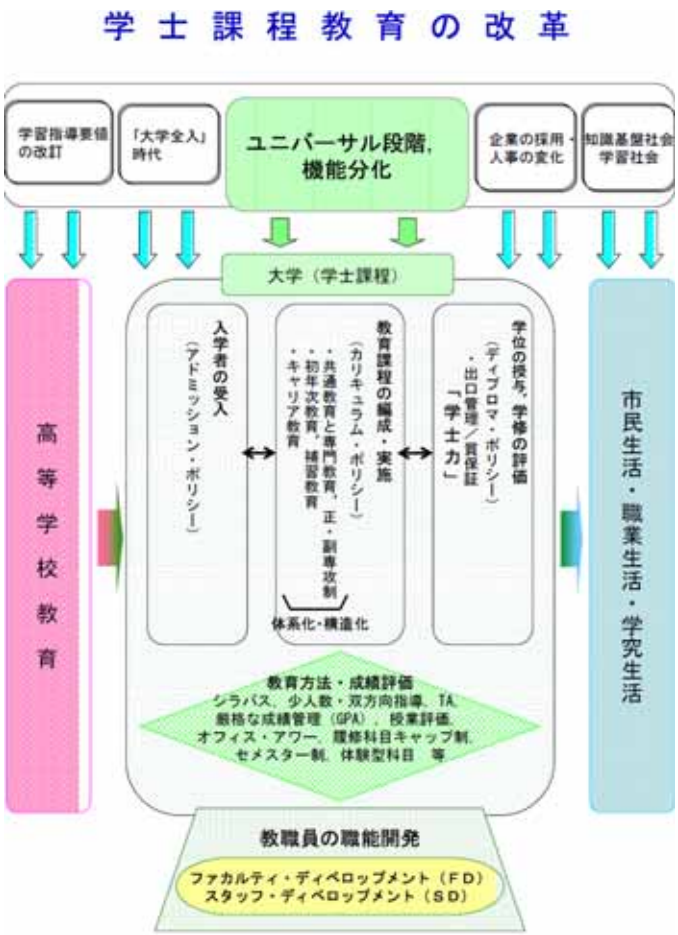
【レジュメ】

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」
が目指すもの

上智大学　髙　祖　敏　明

Ⅰ．はじめに―「戸惑い」と「ためらい」と
　１）中央教育審議会の「本答申」いまだ出ず
　２）学術会議「分野別質保証の在り方委員会」に加わって
　３）「学士課程教育の構築」という課題の大きさ
Ⅱ．「学士課程教育の構築に向けて」の構造と特色―「審議のまとめ」から「答申(案)」へ
　１）形式面に目を向けて　　⇒　資料１、２
　２）内容面から―概要を手がかりとして　　⇒　資料３
Ⅲ．学士課程教育の質保証に向けた改革構想をめぐるいくつかの論点
　１）「質の保証」とは何の質の保証か？
　２）「多様性」の追求と教育の質の「標準性」は調和・両立できるのか？
　３）教育課程編成・実施の方針をどう体系化・構造化するか？
　①初年次教育の組織的展開、②学生支援の総合化の試み
　　⇒　資料４、５、６
Ⅳ．むすび―審議に加わって思うこと
　１）「審議のまとめ」も「答申(案)」も現在進行形
　２）将来に向けたグランドデザインをどう描くのか？
　３）大学団体等の活性化と連携強化を

【資料1】



【資料 3】

資料4－1
中央教育審議会大学分科会（第71回）
H20. 10. 29

「学士課程教育の構築に向けて」
中央教育審議会答申（案）の概要

1．基本的な認識

○　グローバル化する知識基盤社会において，学士レベルの資質能力を備える人材養成は重要な課題である。

○　他方，目先の学生確保が優先される傾向がある中，大学や学位の水準が曖昧になったり，学位の国際的通用性が失われたりしてはならない。

○　各大学の自主的な改革を通じ，学士課程教育における３つの方針の明確化等を進める必要がある。

2．主な内容

【現状・課題】	【改善方策の例】
(1) 学位授与の方針について ・他の先進国では「何を教えるか」より「何ができるようになるか」を重視した取組が進展 ・一方，我が国の大学が掲げる教育研究の目的等に総じて抽象的 ・学位授与の方針が，教育課程の編成や学修評価の在り方を律するものとなっていない ・大学の多様化は進んだが，学士課程を通じた最低限の共通性が重視されていない	・大学は，卒業に当たっての学位授与の方針を具体化・明確化し，積極的に公開 ・国は学士力に関し，参考指針を提示 〔学士力に関する主な内容〕 １．知識・理解（文化，社会，自然　等） ２．汎用的技能（コミュニケーションスキル，数量的スキル，問題解決能力　等） ３．態度・志向性（自己管理力，チームワーク，倫理観，社会的責任　等） ４．総合的な学習経験と創造的思考力
(2) 教育課程編成・実施の方針について ・学修の系統性・順次性が配慮されていないとの指摘 ・学生の学習時間が短く，授業時間外の学修を含めて45時間で１単位とする考え方が徹底されていない ・成績評価が教員の裁量に依存しており，組織的な取組が弱いとの指摘	・順次性のある体系的な教育課程を編成 ・国は分野別のコア・カリキュラム作成を支援 ・学生の学習時間の実態を把握した上で，単位制度を実質化 ・成績評価基準を策定し，ＧＰＡ等の客観的な評価基準を適用
(3) 入学者受入れの方針について ・大学全入時代を迎え，入試によって高校の質保証や大学の入口管理を行うことが困難 ・特定の大学をめぐる過度の競争 ・総じて，学生の学習意欲の低下や目的意識が希薄化	・大学は，大学と受験生のマッチングの観点から入学者受入れ方針を明確化 ・入試方法を点検し，適切な見直し ・初年次教育の充実や高大連携を推進
(4) その他 ・ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）は普及したが，教育力向上に十分つながっていない ・設置認可は弾力化されたが，質保証の観点から懸念すべき状況も見られる ・これらの活動に係る財政支援が不可欠	・教員，大学職員への研修の活性化と，教員業績評価での教育面の重視 ・自己点検・評価の確実な実施，分野別質保証の枠組みづくりのため日本学術会議への審議依頼等の質保証の仕組みを強化 ・財政支援の強化と説明責任の徹底

答申(案)の最大のポイントは、入学者の受入に関する「アドミッション・ポリシー」と教育課程の編成・実施に関する「カリキュラム・ポリシー」に加えて、学部を卒業する学生の能力が「学士」に相応しいことを保証する「ディプロマ・ポリシー」の重要性を指摘したことにあります。教職員（Faculty と Staff）の職能開発（ＦＤとＳＤ）は、これらの三つのポリシーに基づく学士課程教育全体を支える役割に位置づけられています。

問題は、学士の質保証の基準をどのように設定するかです。これについては、学術会議の「大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会」で検討が行われており、髙祖先生はその委員としてもご活躍されています。しかし、教育内容は、学問分野によって異なるだけでなく、課程の構造（例えば国家試験と接続しているかどうかなど）、入学者の学力、大学の規模、設置形態、機能別分化（例えば世界的教育拠点、コミュニティカレッジ、地域貢献など）等の点においても多様化しているので、学士の質保証の基準を定めることは極めて困難な課題になると予想されます。

教育課程編成・実施の方針については、上智短期大学が文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」によって実施中の「サービスラーニングによる学生支援の総合化」を例として説明されました。元々はベトナム戦争のころにインドシナ難民として入国した人々の日本語学習支援活動として始まったボランティア活動を、キリス

ト教ヒューマニズム、国際性と言語教育を結合した「サービスラーニング」として位置づけ、学外の学びと学内の学びとの総合化を進めることによって、ライフデザインができる人材の育成、コミュニケーション能力の養成、並びに社会人基礎力の養成という三大目標を達成しようとするものだそうです。

本学におけるＦＤ活動の在り方を見直す中で、髙祖先生の講演内容は貴重な参考として役立つものと思われます。

公開授業

今年も例年のとおり「公開授業」が実施されました。文学部はもうすでに６月に終え、今回は駒澤大学にふさわしい４０分間の坐禅授業で仏教学部とその他の学部を合わせて計１０名の講師による「公開授業」でしたが、FD NEWSLETTER 第 17 号の入稿の都合上、１２月３日に実施される総合教育研究部の公開授業の報告は次号に掲載する予定です。

昨年同様、専門分野の異なるいろいろな講義の内容で、大、小の教場での授業でした。学生と一緒に机を並べ、学生の目線で授業を受けてみると、普段、教壇では気がつかずに見過ごしていた、意外にしっかりしている学生の一面が見えてきたり、大変熱心に授業を展開されている講師の話を聞いていると、新しい自分(Something　new　in life）を発見することができました。「公開授業」が今後の授業運営に大変役立つことを再確認するよい機会にもなりました。

しかし、今年も参観者が少なかったのが残念です。学生による授業アンケートから始まったＦＤ活動が、授業の内容や方法の改善に成果を挙げるようになるまでには、様々な試行錯誤を経なければならないでしょう。そうした試みの一環として公開授業の充実を図っていく必要があるように感じます。

平成２０年度　公　開　授　業　一　覧

担当教員	科　目　名 （履修学生）	日　時 時　限 教　場	授　業　内　容
仏教学部 教授・石井清純 講師・松田陽志	坐禅Ⅱ （禅仏３４選）	１１月１３日（木） １時限 禅研　坐禅堂	坐禅の実習を行います。9 時 30 分に坐禅堂にご集合ください。簡単な作法の説明の後、坐禅堂内にて実習後半の 40 分間、学生と共にお坐りいただきます。
経済学部 教授・姉歯　暁	消費経済論 （商２３４選）	１１月１７日（月） ４時限 ８－２５７	消費者は選べるのか？ ①日本の食料・農業が抱える構造的な問題点。 ②「情報」の危うさを認識する。 ③「選ぶ自由」はいつまで可能か？－食料安全保障問題。 ④新しい産－消連携モデルを検証する。 講義の進み方によって、このいずれかの項目について講義を行います。（レジュメ配布あり）

経済学部 講師・松本典子	非営利組織論ｂ （現２３４選必）	１１月１９日（水） ３時限 ８－１５０	NPO の資金調達～NPO バンク（東京 CPB）の事例を中心に～ 特別講師：東京コミュニティパワーバンク理事長 坪井眞里
法学部 講師・山崎　望	現代政治理論 （政１２３４選必）	１１月１７日（月） ３時限 ８－４６５	2001 年 9 月 11 日の「対米同時多発テロ」以降、関心が集まっている「イスラーム原理主義」の思想と行動について、グローバル化との関連から考える。
経営学部 教授・青木茂樹	マーケティング・チャネル論 （営Ａ３４選）	１１月２５日（火） ３時限 ２－１０１	企業は、販売目的を達成するためにマーケティング・チャネルを構築するが、これに関わる戦略課題とケースを紹介する。適宜、グループワークを行っている。
経営学部 准教授・日野健太	経営組織論 （営Ａ２３４選）	１１月２６日（水） ２時限 ９－３９１	資源依存モデル。資源の支配者の言うことを聞かねばならないので、組織の自由裁量は制約されている、ということを普通に講義する。
医療健康科学部 講師・金子順一	電子工学 （放２必修）	１１月１３日（木） ２時限 ７－２０２	電子回路技術について、講義を行う。内容としては、デジタル信号回路および論理回路・論理演算を予定している。
グローバル・メディア・スタディーズ学部 講師・吉田尚史	インターネットとメディア （ＧＭ１選必）	１１月１８日（火） １時限 １－２０１	この授業では、インターネットの原理、要素技術、およびそれらの応用を、PC による実習を伴って学習する。この日は、マルチメディアデータの検索方式について、講義および実習を行う。
総合教育研究部 教授・萩原義雄	実務表現 （禅仏国英地文環境歴日外考法Ａ政営Ａ市１２３４選）	１２月３日（水） ３時限 ４－３０２	詩や短歌を用いてことば遊びから学ぶ。 日常良く目にする日本語のなかでも、「ことば遊び」をふんだんに使用する宣伝広告媒体を前提にしながら、古典的な詩や短歌の修辞法の教養性を学ぶことによって、現代日本語の文章を綴る新たな表現方法の手がかりを導き出すことを主眼にこの講義を設定した。
総合教育研究部 講師・セイジ、Ｋ	英会話 II （全学科（フレＢ除く）２３４選）	１２月３日（水） １時限 １－３０５	英会話のストラテジーについての文法を学ぶ。 1）話題は“Authentic”教材から選ぶ。 2）教師から英会話のストラテジーの使い方を教え、デモを示す。 3）Pairwork で学生に英会話のストラテジーを練習させる。

「坐禅の授業に対する所感」

仏教学部講師　松田　陽志

坐禅の公開授業は昨年度に続き二回目であった。参加いただいた方々には、学生と全く同様に坐禅をしていただいた。前回も書いたように、授業の内容や指導の仕方は全く変わらない。時間厳守で 40 分の坐禅を二回、間に経行という、自分の息に合わせた歩行を挟んで行う。いつも考えているのは、どうか前向きに坐禅してもらいたいということだけである。

公開授業に参加された方も恐らく感じただろうと思うが、坐禅していて感じる、肉体的かつ精神的葛藤や、さまざまなプレッシャーに立ち向かう必要もなく、気ままに楽に坐禅する人など、恐らく一人もいないであろう。姿勢を正しくして、坐り続けようとするという、極めて単純なことに、学生も私も対峙している。坐蒲の上で、自分自身と向き合い、足の痛さや眠さ、やめて楽になりたいという気持ちを自制しようとする気持ちを起こせるか否かで、学生の態度は大きく異なる。

授業アンケートでの感想に、坐禅自体や私の指導に対する嫌な気分を率直に書いてくる学生もいる。しかし、だからといって坐禅自体を楽にするような指導はできない。主体的に坐禅に取り組み、自分と真剣に闘うことにこそ、坐禅の意義はあるのではないだろうか。

歯をくいしばって、楽に走りがちな自分を制することが必要だ、という意識を持てるようになるにはどうしたらよいか。自分でも難しいが、坐禅堂では皆が同じ時間、同じ作法で坐っていて、自分だけではなく、きっと隣に坐っている人も苦しんで、嫌がって、しかしそれでも自分を奮い立たせて坐禅していることを感ずることが大切ではないかと思う。

朝一時限の前に坐禅堂に入り、前向きな姿勢で坐蒲の上に坐るために、どのようにはたらきかけたらいいのか、試行錯誤の状態である。理屈ではなく、できるだけ率直に話しかけ促すことが必要か、と感じているが、それもなかなかうまくいかない。自分なりにこれからも考えていきたい。

「公開授業を終えて」

経済学部教授　姉歯　　暁

お忙しい中を公開授業にご参加いただいた教職員の皆様からは大変心温まる感想を頂戴した。1 時間半の時間を共に過ごさせていただき感想をお寄せいただいたことに、この場をお借りして心より御礼を申し上げたい。公開担当者としては、そもそも公開授業に参加いただける人数が極めて限られたものとなると予想していたが、やはり予想通りであった。公開期間が 1 週間のみであること、そもそも自分の講義と重なっていない公開科目を見つけられなければ顔を出せないこと、またたとえ講義が重なっていなくとも、学生が部屋に来ないときを見計らいつつ自分の授業の合間を縫って他の講義に顔を出すことは、多忙極まりない講義や学生指導の毎日では、かなりの動機付けがなければ難しい。私自身は、時間割上問題のない限りにおいてではあるが、学びたい講義についてはお願いして1年間を通して授業に参加させてもらっている。すばらしい講義に、私の取るノートも三冊目に突入した。今後ともこのような機会を与えて頂きたいと思っている。時に、学生から「私語を注意するうるさいババア」と思われても、心の中では「こうしてあなた方と一緒に講義を受

けることで私自身の講義の力量が上がるんだから、あなた方のためでもあるのだよ」と繰り返しながら・・・。私は、本来、受けたい講義は担当者に許可を得て受けに行けばいいと思っているので、今回のように自分の講義を「公開授業」と銘打つことも気恥ずかしい。

もし、公開授業が「外部評価のための数値面でのアピール」や「なんらかの強制力」として設定されるのであれば、公開授業を重荷に感じ、参加者を「監視の目」と考えなければならなくなるだろう。しかし、教職員同士の信頼関係が確立されていれば、自然にすばらしい講義からは学びたいと思うし、そう行動することになる。今後も、その延長上に「公開授業＝開かれた講義」が続けられることを願いたい。私も、これだけ多彩な学部があり魅力的な講義科目が設置されている本学に所属している幸せに心弾ませながら、教え、学ぶことを学生と共に純粋に楽しみたいと思う。

「公開授業を終えて」

経済学部講師　松本　典子

１．講義内容

11 月 19 日（水）3 限の「非営利組織論 b」で公開授業を行いました。お忙しい中お越しいただいた教職員の方々、ありがとうございました。

本講義は、非営利組織の経営学について学んでいます。非営利組織が社会的課題を解決するためには事業を行うことも必要です。特に非営利組織では資金をどのように調達するかが問われます。そこで 19 日は、東京コミュニティーパワーバンク理事長の坪井眞理さんをゲスト講師に迎え、「まちを元気にするしくみ～市民がつくった市民のための銀行～」というタイトルで約１時間お話をしていただきました。その後、学生から質疑を受けるという双方向スタイルの講義を行いました。ゲスト講義や VTR を利用して講義を行った場合は、本校の e-learning システムである YeStudy を利用して学生に感想・意見等を提出してもらいます。学生から受けた意見等を集約してゲスト講師にお渡しした後、授業アンケートと併せて次年度の講義に活かせるよう努めています。

２．公開授業を通じて学んだこと

本講義は約 300 人の学生が履修しています。レジュメを配布していると開始までに 10 分近くかかってしまうため、配布方法に工夫が必要だと思いました。また、講義中の私語をなくし、300 人の学生が積極的に講義に参加し、１人１人が考えられるようにするためにはどのような講義スタイルをとればよいかも課題であると感じました。普段の講義を教職員の方々に公開することで、改めて自身の講義を見直す良い機会になりました。

今まで公開授業に参加したことはありませんでしたが、これを機に他の先生方の公開授業から様々な講義手法を学びたいと思っております。よろしくお願いいたします。

「ＦＤ公開授業を終えて」

法学部講師　山崎　　望

１１月１７日、ＦＤ公開授業を担当した感想を記したい。私は「現代政治理論」という科目を担当し、今回は「イスラ

ーム原理主義」過激派の思想と行動について、解説、及び問題提起を行った。公開授業との事で、かなりの緊張を伴い講義に臨んだが、教員の参加者は１名、職員の参加者は３名、出席学生も３００名近くであり、普段と変わりなく講義を行えた。講義では毎週、終了１０分前に、レスポンスカードと名付けた用紙に質問や感想を学生に書いて頂き、翌週冒頭にその一部への応答を行う。その後、配布したレジュメを中心に講義を行う。講義において気になった点は、１年に数回、私語をする学生がおり、注意せざるを得ない事である（今回も注意をせざるを得なかった事は、残念である）。他の学生からは「私語をした学生は厳罰に処すべき」といった意見が多々よせられ、中には私語を放置する教員もおり履修に支障をきたす、といった苦情も耳にする。圧倒的少数者であるとはいえ、いかなる対処が有効であるのか、何らかの方法で取り組む必要があるように思われる。

またＦＤ公開授業の制度自体への雑感として、講義に参加して頂いた方々からは良い点の指摘に加えて建設的なアドバイスを頂き、感謝する次第である。その意味で教員相互間での教育方法の向上の一契機として有効性はあると考える。しかし参加者は教員内ではＦＤ推進委員会の担当者１名であり、運営方法に一抹の疑問を持たざるを得ない。事前通知の徹底にも関わらず、参加者が僅少である理由について検討し、場合によっては制度を再検討すべきではないだろうか。

最後に、蛇足であるが、既に FD NEWSLETTER 第 16 号において、入学センター所長・佐藤千春氏が書かれているように、教育の質を高める、という目的に立つＦＤ推進委員会の真摯な試みが、意図とは別に、ＦＤ評価に振り回される教員を産み、「教育を金銭で図る」事を良し、とする社会的風潮を加速させる結果になってはいないか、という懸念を私はぬぐえない。教育に対する多様な見解について教員相互で意見交換し、駒澤大学における教育の原点について考える事も必要ではないか、と考える次第である。

「マーケティング・チャネル論における取組み」

経営学部教授　青木　茂樹

皆様はじめまして。今年から経営学部に所属となりました。駒澤大学のシステムや学生の資質をまだ十分に理解できておらず暗中模索の状況ですが、ＦＤの公開授業をするようにご指名がありましたので、お引き受けいたしました。これについて、授業後のコメントをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私の今年の講義の目標は、「講義中に学生の思考する量・質をどのように高めるか」ということです。講義はややもすると、カラオケでマイクを離さぬ客のような“教員の話した満足”になりがちです。その結果は、自分の歌声に酔うのをやめて、学生（他の客）の表情をよく見ていればわかります。興味もなくやり過ごし漫然と時間が過ぎるのを待っていたり、内職に勤んでいたりと、悲しい現実があるものです。これを学生の質のせいだと決めつけるのは簡単ですが、自分の責任をもちろん感じますし、教員としての仕事としてのやりがいも満たされないものです。

自分の学生時代の経験からも、講義は大して聞かずに、試験前だけ付け焼刃の記憶力でどうにかやり過ごして単位を取得して満足していました。が、そんな小手先の要領は大した意味がないことはよく分かっています。

さらに、企業も社員教育に費用をかけられない時代となり、即戦力が求められ、新卒よりも中途採用の社員が重宝がられたりもしています。一昔前であれば“大学生活はモラトリアムでいいのだ”と私も思っていましたが、社会情勢から考えても大学教育も変化しなくてはならないのだと常々感じております。

とはいえ、私の器量が特段優れているわけはなく、学生を動機づけすることもなかなかうまくいかないままであり、見学に来ていただいた教職員の皆様はおわかりの通り、試行錯誤しているわけです。反省を込めて、現状を以下に申し上げ

ます。

1）　名前で呼び合う関係づくり

講義では名札を学生につけてもらっています。ホルダーは初回に配布し、自分で名前を書いて持ってきてもらっています。マス教育では、どうしても匿名性となるが故に、学生は無責任な授業態度にもなりますし、私も高額な授業料を4年間も払っていただいていながら学生の名前や顔が一致するのはゼミ生＋数名程度しかおりません。これを反省し、名前を呼び合う関係、顔を合わせれば挨拶をする関係によって学生と教員との信頼関係を築こうとしています。

問題点：名札の提示が全体にはなかなか定着していません。出席管理システムなどがあって、これと連動するならば必携となるのでしょうが。

2）　講義の最初に小テスト

普段、基本的文献や新聞に目を通していない学生が大半なので、新書の用語集から1回に10頁から3問だけの小テストを行っています。何もしないよりはましかと思ってやっているのですが、この効果のほどはわかりません（今年の授業アンケートで学生にはその効果のほどを質問しています）。半分くらいの学生は予習をしてきています。回答は、ペーパレス化や管理の容易性から各自の携帯メールで私のメール宛に送ってもらっています。

問題点：最初は大切な導入部（前菜）なので本当は最近のトピックなど学生の関心を引く話から始めたいのが本音です。小テストから授業に入ると雰囲気がよくありません。

アンケートから小テストの効果が無いようであれば、来年は、“Marketing Eye”と題して、学生が気づいたり興味をもったマーケティング・ニュースをメールで送ってもらって、私がその場でメールを開き、適宜、議論のネタや解説を加えるなどを試みようかとも考えています。学生には、日常生活のなかで情報収集や観察力を養ってもらいたいというのが目的です。出席へのある程度の強制力にもなるかと思います。

3）　ワークシート形式のレジュメを配布し、パワーポイントによる解説

講義形式は多くの先生と同様にパワーポイントで行っております。ただ配るだけではもらって安心する学生もいるので、ワークシートのように（　　）の虫食い箇所をつくり、事前に一読してもらって虫食いを埋めてもらう時間をつくっています。

板書形式も書くことで覚えることもあるので有効かと思いますが、今年の講義では自分で考えたり、議論したりすることに時間を使いたいので、時間制約からも資料配布によって講義を進めています。

問題点：板書形式とパワーポイント形式のどちらが有効かはわからないので、授業アンケートでどちらがタメになるかを聞いています。資料を入手しただけで安心し、内職をさっさと始める小利口な学生や聞き逃しても構わないと集中力に欠ける学生もおりますので、資料配布も善し悪しがあるようです。

4）　グループワークの導入

適宜、グループワークを行っています。理論や仮説を挙げて、事例を相談させるという簡易なものから、時には企画書やレポートの作成からプレゼンテーションまでの数回にわたる大規模なものまであります。

一方的に講義を聴くだけではなく主体的に考え、発言の場を与えることは、学生の学習意欲の喚起に役立っているようで、これを楽しんでいる学生はどんどん伸びているように感じます。

問題点：見知らぬメンバーとグループになり議論する習慣をつけるのに、大人数では手間がかかります。また大規模なワークでは数回の講義に渡ることで、毎回メンバーの過不足が出てしまい調整が大変です。

5）　発言者にはポイントカード

授業内に挙手してコメントした者にはポイントカードを渡しています。溜まったものは最後の講義で提出して、採点に加えるという方式です。

問題点：本来、少しでも多くの発言をと期待していたのですが、定番の学生が決まってしまっています。発言を楽しんでいる学生は必ずしもポイント狙いの学生でも無いようです。

６）　新聞記事などの適宜配布

講義に関連するテーマは適宜、配布し解説を加えています。アップデートな情報は学生にも関心が高いようです。

主として、以上の方法によって「講義中に学生の思考する量・質をどのように高めるか」という課題に対応しております。

最後にご参加頂いた先生からご指摘頂きましたが、第２研究館の101教室はマイクの音量が小さく、こもりがちで非常に聞きにくいとのことでした。私も使いにくさを感じながら大声を出してどうにか対応しておりました。どんなにいいミュージシャンでもコンサートホールの音響が悪いといいライブにはなりません。その他にも学生から様々な声を聞いています。プロジェクターが見にくい、無線LANがつながりにくい場所がある、配布資料がB4だったりA4 だったりと教員によってまちまちだ、講義情報が掲示だったり研究室前であったりウェブだったり教員によってまちまちだ、など不便があるようです。こういうことは授業アンケートでは見えない部分でありながら、学生にとっては大変不都合であります。ＦＤのさらなる向上のために、個々の教員の努力はさることながら、学生の視点から教室環境や授業支援環境の再点検を学生も交えたプロジェクトチームをつくり、早急に再点検して頂きたいと存じます。

「駒澤大学の FD，わたしの FD。」

経営学部准教授　日野　健太

当日は，資源依存理論というテーマについて講義した。エッセンスを述べれば，組織はその生存に不可欠な資源を外部に依存しており，その期待に応えるように自由裁量は制約されている，という主張である。

さしずめ，駒澤大学は文部科学省から，補助金や許認可を得るために，文部科学省だの大学基準協会だのの決めた枠組みにしたがって，ＦＤやら授業アンケートやらをやらなければならない，ということになる。もちろん，正面切って反抗するのは賢い策ではない一方で，その正しさを無条件に信奉させるようなメカニズムが組織には備わっている。だから，融和や説得，一部のリソースを使ってのアリバイづくりが必要，というところまで取り上げた。そんなわけで資源依存理論は，そのあり方はともかくＦＤ活動の必要性を説明している。

さて，他の先生の講義の話を聞けば参考になることはたくさんある。同じような思いで教壇に立たれていることを教えていただいて元気づけられたこともあった。だから，他の先生の公開授業におじゃまする時があるかもしれない。授業アンケートの自由回答の記述にはっとさせられたことも，過去に１回あった（ただし，その１回だけである）。

しかし，現在，私の有限な仕事の時間を大きくそれに割く必要があるかといえば，疑問である。歯を食いしばって独り立ちしなければならない時に，へらへら悩みを話して，よそに解決策を求めていて良いのだろうか，という自覚もある。准教授の２年目は自分の専門領域について研究を深め，それを教場で還元することを目指すべき時ではないか。きちんと勉強しなければ，毎年同じことの繰り返しに疲弊していくだけではないのか。以上の個人的な心情の吐露ともに，駒澤大学も本質と形式を混同して，後者に多大なリソースを割くべ

き時なのか，私はそれも問いたい。

「公開授業を終えての感想」

医療健康科学部講師　金子　順一

11 月 13 日に電子工学の講義で公開授業を行いました。本学部の学生は、卒業後はほとんど病院等の医療分野に就職することとなります。医療系の現場では数少ない、いわゆる理系の技術者として活躍できるよう、数字の裏付けに基づいて考えるということを重視して講義を行ったつもりですが、力量不足でなかなか理想通りの講義はできていないようにも思います。今回の公開授業で頂戴した感想を基に、自分が感じた講義の反省点をいくつかあげてみたいと思います。

１．講義の進行が早すぎる

電子工学は物質の構造からコンピュータなどの電子機器に至るきわめて幅広い内容を持つ分野であり、一年間という極めて限られた時間で全てを網羅することは非常に困難です。そのため、内容を相当に絞り込む必要があるのですが、講義を行う立場からはどうしても、あれもやりたい、これもやりたいとなってしまい、学生の理解度が充分であるかどうかという点がおろそかになりがちです。自分自身の学生時代を振り返ってみても、講義で聞いただけの内容というのは、自分では分かったつもりになっていても実際にはそうではなく、自分で手を動かし考えてもみないと、本当には理解はできないように思います。もう少し講義時間中に、学生自身が内容を消化する余裕を作っていく必要があると感じました。

２．板書の量が多過ぎて考える時間が足りない。

講義をしている人間としては、細かいことは全部教科書に書いてあるので、ノートに全部写す必要はないと思ってしまうのですが、聞いている立場としては受け取り方は異なるようです。資料配布を行うと、どうしてもそれにとらわれてしまう面もあるのですが、工夫をしていく必要があると思います。

公開授業のように、専門外の方から意見を頂戴する機会というのはあまり無く、講義内容について改めて考える非常に良い機会となりました。ありがとうございました。

「インターネットとメディア」

グローバル・メディア・スタディーズ学部講師
吉田　尚史

本稿では，GMS 学部の授業「インターネットとメディア」の公開授業(2008 年度)を通じ，ＦＤ活動の今後の展望を議論する．

この授業では，インターネットの原理，要素技術，およびそれらの応用を，PC による実習を伴って学習する．この日は，マルチメディアデータの検索方式について，講義および実習を行った．

この公開授業を通じて，ＦＤとして具体的に本学でなにができるかと考えた．ＦＤ推進委員会でもＦＤ自体の定義についての議論があったようだが，抽象的な議論はともかく，具体的にすぐ取組できるものとしては，次の 2 点が考えられる．

(1)授業補助者および TA の制度の拡充

(2)オンライン授業配信

まず(1)について，公開授業をご覧頂けた先生にはお分かりだろうが，この授業は実習を含んでいる．すなわち，教員の手が回らないので，授業補助者や TA(Teaching Assistant)が多い方が，教育効果は大きく上がることが期待できる．しかしながらどうやら本学には，1 年間で学部において通年 7 コマ分(半期で換算すると半期 14 コマ分)の授業補助者しかつけられないとか，大学院を持っていない学部には大学院生がいないので TA がつけられないとか，本質的ではない部分に制約があり，とても十分な制度とはいえない．

もちろん授業を補助してくれる学生自身の勉学に割く時

間の問題や予算の問題もあろうが，極端に多くの授業補助を実施しない限り，問題にはならないはずである．実際，授業アンケートにも，その要望が多い．分野や授業の内容にもよるが，改善の余地があるように考えられる．

(2)については，まずは学生向けに復習の便を考えて実施することの意義が大きいように考えられる．この授業は GMS 学部設置と同時に開始されたので，2006 年から数えて 3 年目だが，学期末になると，この部分をもう一度教えてほしいといったリクエストが多い．どうやら Moodle 等の授業支援システム上の資料だけでは不十分らしく，授業で発言した内容をもう一度参照するだけでも，相当大きな効果があると考えられる．特に，多人数の履修者がいる授業ではなおさら効果が大きい．将来的にはこれを拡張し，他大学や他の組織との交流に利用したり，教場不足のために利用したり，地域への貢献や入学前教育に応用したりと，応用範囲も広い．学外に目を向ける機会としては絶好である．必要な予算としても，ビデオカメラ購入など，そう多くの予算は必要ないと考えられる．ぜひ具体的に検討すべきと思う．

もちろんＦＤそのものの定義や意義を考えることは重要である．しかし，それと同時に，上記のような具体的な取組も有効ではなかろうか．

なお，この授業の資料は全学の Moodle「YeStudy」上でも参照可能なので，適宜参照されたい．

ＦＤ推進委員会の今後の活動予定

○平成 20 年度第 8 回　ＦＤ推進委員会小委員会開催
　　平成 21 年 2 月 26 日（木）

編集後記

今回の FD NEWSLETTER は、主に「ＦＤ研修会」と各学部等主催の「公開授業」についての内容です。１１月の大変忙しいなか、原稿をお寄せ頂いた先生方、有難うございます。

ＦＤ研修会のテーマは、髙祖敏明先生の「中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」が目指すもの」です。現在、大学生の学士力が問われていますが、この課題をどのように解決できるのかの話です。大学の大衆化が進み、ひと昔前は、１０人に１人の大学生が、今や２人に１人になった。もはや当然、昔のエリート教育そのままの教育では新しい時代の波に乗り遅れてしまう。そのため、本学でも数年前からＦＤ活動を開始して、「授業の内容と方法の改善」を目指してきた。如何にしたら、入学から卒業までの間に社会に出て通用する学士力を養成することができるのか。この問題に関する髙祖先生の明快な講演を聞き、本学でも、早急に組織的にこの課題の解決に当たる必要性を痛感しました。

公開授業について、ひと昔前は、他の学科の先生による授業参加は全く皆無でした。しかし、今や、高度情報化社会の到来、社会のグローバル化で、専門の学力だけでなく教養の知識も充分に身につける授業の展開が必要になってきました。各教科の先生は、他の教科の先生と連係をはかり、大学教育活動の根幹をなす授業で、よりよい授業の改善に努める必要があります。

今や、ひと昔前の専門だけを教えていれば事足れり、という大学の“象牙の塔”は許されない。広い教養を身につけた学士力を大学全体で、よりシステマチックに養成する必要があります。この FD NEWSLETTER が大学のより良い教育研究活動の一助になれば幸いです。　　（苗村憲司、高野秀夫）

【タイトル横の写真は、禅文化歴史博物館と紅葉した銀杏の木】

ＦＤ NEWSLETTER Dec.2008 第 17 号
発行日：2008 年 12 月 15 日
発行者：駒澤大学ＦＤ推進委員会
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1
TEL 03-3418-9125　Fax 03-3418-9114
（事務局：教務部）